秋田魁新報　2025年08月03日付　にちよう学芸左

Come On! 文化部 40

笑顔あふれる舞台を

大曲農業高太田分校 郷土芸能部

今年で15回目を数える大仙市太田町の「太田の夏まつり」（2月開催）を3週間後に控えた7月上旬、大曲農業高校太田分校の教室で、出演する郷土芸能部が全体練習を行った。普段の練習とは違い、この日はまつり当日と同じ衣装。部員たちはちょっと緊張した面持ちだ。

練習曲は、秋田を代表する民謡のドンパン節。太鼓の佐藤夏姫さん（2年）、笛の篠塚真那実さん（1年）らがお囃子を奏で、かすり姿の樫尾安生さん、湯野澤心紅さん（共に2年）が軽やかな手さばきで踊り出す。副部長の古村彩遠さん（2年）が「ドンドンバンバン」と唄声を響かせた。演目を終えると、緊張がほぐれたのか、笑顔が戻った。

日々の活動は放課後の約1時間。それぞれ自分たちのペースでゆったりと始める。農産物の生産販売などを手がけるグリーンライフクラブと兼部している部員もいるため、クラブのない木曜日を全体練習日、それ以外の平日を唄、楽器（太鼓、三味線、尺八、横笛）、手踊りの担当ごとに個別練習する日に当てている。週末にイベントやステージの出演予定があれば、土曜日も練習日に加える。

太田分校では、地域貢献活動の一環として、地元で継承している人たちを師匠に全校生徒が民謡や民俗を学ぶ講座を開講。11月の民謡発表会と共に恒例行事となっている。部員たちのレパートリーは、ドンパン節のほか、地元で親しまれる長者の山、仙北市田沢湖に伝わる正調生保内節など大仙北地域の民謡が中心だ。

民謡を聞いたことはあっても、演奏や踊りの経験が全くなかったという部員がほとんど。初めは先輩から代々受け継がれてきた譜面を読んだり、リズムをつかんだりするだけでも一苦労だったという。地元の人たちの協力に加え、部員同士でも改善点を互いに指摘し合いながら、徐々に曲や踊り方を覚えてきた。唄と三味線を担当する古村さんは「民謡は音の調子に意味があると思える音楽。すごく楽しいし、やりきった達成感の後は、もっと上達したくなる」と目を輝かせる。

郷土芸能部では、学校行事や全県規模の県高校郷土芸能発表会以外にも、太田の夏まつりのような地域イベントでステージを披露。通年で市内施設へ慰問にも訪れる。4月には前校長の紹介が縁で、能代市でも演目を披露した。

観衆が心躍り笑顔あふれる発表にしよう―。これが部の目標だ。顧問の能美政通教諭は「人前に出て披露する機会が多くなれば、部員たちの経験になる。今までできなかったことができるようになる喜びを感じ、励みにしてほしい」と語る。

（樋方幸人）

〈第1日曜日に掲載〉

2日の「太田の夏まつり」でのステージに向けてドンパン節を練習する郷土芸能部の部員

短歌詠むもう一つの顔

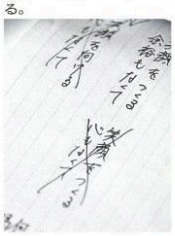
民謡演奏と共通点？

郷土芸能部の２年生には、短歌を詠むというもう一つの顔がある。部長の高橋奈々美さんと部員の山方萌佳さん、湯野澤心紅さんの３人は１年生だった昨年、全国高校生短歌大会（通称・短歌甲子園）の予選を通過し、盛岡市での本大会に初出場した。

短歌作りは、国語担当でもある顧問の能美政通教諭が、授業で呼びかけたのがきっかけ。三十一文字（みそひともじ）で自分の気持ちや情景を伝える奥深さに触れ、生徒たちが夢中になった。

最近では、県歌人懇話会主催の６月の全県短歌大会で、高橋さんの１首＜再会の言葉遣いで気がついた前の仲には戻れないこと＞が互選賞に選ばれた。高橋さん、山方さん、副部長の古村彩遠さんの３人で臨んだ今年の短歌甲子園は、惜しくも予選通過はならなかった。

ノートとスマートフォンを併用し、テーマや心に浮かんだフレーズを書き留めている高橋さん。唄と三味線を受け持つ郷土芸能部の活動と短歌作りの共通点を「ゆったりしたテンポの民謡を演奏するように、短歌も作る時はゆったりとした時間が流れているように感じる」と話す。友人と下校する帰り道にひらめくことが多いという。この夏休み中は、郷土芸能部としてのイベント出演や準備のほか、県高校文芸コンクールに向けた創作などで忙しい日々を送る。



高橋さんが持ち歩く短歌のノート。×印をつけるなど推敲（すいこう）の跡がみられる

◇部長から一言◇

披露する場に感謝

高橋　奈々美さん（２年）

みんな高校から始めたばかりで、技術的にはまだまだ未熟です。少しでも多くのことを学んで習熟したい。そんな思いでこの部を表す言葉を「熟」としました。

普段から失敗してもお互いを責めるようなことはありません。逆に失敗してもいいからやってみようとチャレンジします。

演奏の仕方などに困って、部員みんなで話し合うことは結構あります。そんな時に「できないよね」「分からないよね」と何もしないまま終わるということは、できるだけしたくありません。部長として、全体を見通せる存在になりたいです。

イベントや大会の出演前はそれ相応に緊張しますが、披露できる場があるというだけで本当にありがたいです。

▼創部年＝1989年。郷土芸能クラブ、舞踊部が前身。
▼部員数＝7人（1年1人、2年6人）
▼主な実績＝県高校郷土芸能・日本音楽会合同発表会特別賞（2022年）、県高校郷土芸能発表会審査員特別賞（23年）

ⓒ秋田魁新報社